
【Lesedrama】 Träume sind Schäume

サイルレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Lesedrama】Träume sind Schäume

【Nコード】

N0935R

【作者名】

サイルレン

【あらすじ】

場所の名前も、人の名前も、時間の名前もない。けれど確かに、その思いはあった。（基本残酷な表現があります。）

R u f e (前書き)

(骨が、皮膚が、目が、耳が、鼻が。
五感のうちに其れを創り上げるだろう……)

R u f e

道化師^{ビエロ}がゆつくりと
足を引きずりながらやってくる。

暗い、湿った、
けれどどこか豪華な古びた洋館。

道化師「男は情けないような歌口^{カク}ずさみ
零れかけた皿の平衡を正す。
身体^{カラダ}の歪みは更に非道く
案配^{アンバイ}を望むも空しい。」

男「空言で交わした
己の僻事^{ヒクジ}、
避けるべきはよもや
この泰平^{タイヘイ}の為の涙。」

道化師「口にしてはいけないと
悪魔は何度言えば判るだろうか？
脳の散った骸は
息のような歌を紡いで。」

——「K o m m e h i e r」
と不思議に異国語で
カタリと小首を傾げた道化師。
戯曲^{カキモノ}の大詰め（カタストロフィ）は
緞帳^{カテン}に遮られ終わる。——

—— 蠟の垂れた灯火が
哀れな布切れに燃え移れば、
瞬く間に世界は紅く。
愚か者の眉間を貫いた
リボルヴァー
回転式拳銃の弾すら、
灼熱は呑み込んだ。——

螺旋階段の上から覗く顔は
よく見知った鏡の向こう、
嘲るような口角が目印。
男「彼の名は己ではなく
ルシファー」
堕天使だとも言うのか。」

堕天使「背に背負った翼は重く、
飛ぶには少々厄介物である故
千切って御前にくれてやろう。」
男「見え透いた魂胆に惑うのは故意。」

道化師「純白の羽根は血染めの、
仮初めの美しさを見せる。」
愚かな男は道化師に導かれ
遠く世の果てへの旅路を往く。

堕天使「風刺画に見せた過去、
カリカチュア
賛歌に魅せた未来。
賢者の掌で転がりゆく。」

R u f e (後書き)

ドイツ語は翻訳機に頼ったので間違ってるかもしれませんが・・・

V e r s t e i n e r u n g

奇抜な仮面ベルソナが目を引くような
そんな道化師クラウンは男アニメスを連れ行く。

宮殿には嫌味な妃と
美しい歌姫ディーヴァ。

道化師「ご覧なさい、
眼前の奇蹟を。」

ご覧なさい、
眼前の悪夢を。」

女アニメの首が斬とぶ。

見えない刃の軌道は残像にて残り、
見た姿を慙愧ざんきする程に鋭い。

女「まるで貴女は、悪女サロメのようじゃないか」

悪女「長い髪を振り撒いて、
御前は絶世の美女なのだろう。」

兵士も羨み目が潰れるというよ。

ならば御前、

きつとかづかれたのだね。」

盲目の悪女はほくそ笑む。

道化師「女の首は笑って言う。
『嗚呼、貴女は不幸だ』と。」

男「悪女を捕らえぬのか。」

道化師「捕らえてどうするのか。

青天の霹靂に屈して御前は

悪女の首をも斬とばす気か？」

心を暗視するように道化師は詰めた。

悪女は憤怒し嵐を熾おこす。

風は駆け抜け、

シャンデリア

装飾用電灯は眼底を震わすくらいに音を立て落ちた。

道化師は混沌とした世界を

徐々に掻き混ぜ。

道化師「御前は知る由もない、

悪女の運命など

御前が決然と下せるものではない。」

悪女の首が残月を描いて

ほとりと落ちた。

道化師「林檎のような熟れた赤が

御前の脳裡のうりに焼き付くだろな。

眼球の御前を見詰める姿が。」

男は一步二歩下がる。

爪弾く弦の切れて、男は悲鳴を上げた。

道化師「さあ

己の居るべき場所に帰りたまえ。」

道化師は顔を伏せ、仮面を浮かせて去っていく。

一人残された男、

見えぬ楔で繋がれ帰れず。

男「盲目の悪女、

御前の髪が絡まり離れぬが。

御前のも美しいというのに。」

??見えぬ嫉妬に

見える首と。

見えぬ刃に

見える運命と。

石灰化した身体は雨降る硝子に混じった。??

W
o

青い草原と
モノクローム
白黒の空の下、

ヒロ
道化師は常に男の傍に。
ぽつんと佇む墓に横たわる男の。

男「貴様はいつまでそこに居るのだ」
道化師「御前が死ぬまで」

道化師が返事を返す度に、
地球上の何処かで命は失すという。

道化師「天使にはなれない、悪魔にもなれない。私は私にしか
ない」

男「ならばそれで何が悪い。数百年以上も此処に居るより良い
じゃないか」

道化師は声を出さずに笑った。
何処かで命が海に帰した。

道化師「しかし御前の最期を看取らねばならないのだ」
男「もう死んでいるのにな」

数百年以上前に血に塗れて息絶えた男は

寂しすぎる死後を送る。

道化師「死にもせず、生きもせず、ただ煉獄をも彷徨うことも出来ずに」

男「ウエルギリウスが天国へ案内してくれるだろうか？」

男も声を出さずに笑った。

何処かで命が産声を上げた。

道化師「ウエルギリウス？御前、それはただのベルゼブブかもしれないのに」

男「それがベルゼブブならば、俺は疾うに死んでいるだろう？貴様と違って悪魔だからな」

道化師「判らぬ、ファウストの様に暫くいたぶられるかもしれんぞ」
俺「それはそれで良いかもな。今と変わらぬ」

地獄からも天国からも溢れ、
その受け皿の煉獄からも溢れ、

嗚呼 男は何処に行くというのか。

男「嗚呼、俺は何処に行くというのか」

道化師「手を取れ。私が良い場所に連れて行ってやろう。そうさな、神の居る場所が良いかな」

男「さはれ、俺はこのまま寝たいのだ」

道化師「御前、ずっと寝てきたろう。この数百年で業は清算カルマされた」

男「ウエルギリウスでもベルゼブブでもない、ただの道化師だが、それも心憎し」

男はすくりと立ち上がると、

道化師の手を取り歩き出した。

道化師「行く先は天国か、地獄か？その二極である」

男「願わくは、天国」

？？道化師は男を送り出した後、

再び別の、道化師に魅入られた者のかたへと。

死に神に、悪魔に、天使に、

見捨てられた哀れな者たちの、？？

Leben

静かな大広間に足音が響く。

道化師ビエロの仮面を風に乗せて、

男にふと笑った。

道化師「御前はそれで良いのか？」

男「どういうことだ？」

道化師「御前はそのままに身を任せて、それで良いのか？後悔はしないと？」

男「このまま死んで、か？」

男は声高らかに笑った。

道化師は其の姿を見、首を傾げる。

男「俺は居ない方が良いでしょう？それならばこれで良いのだ」

道化師「あの者たちに別れも告げぬと？」

男「告げぬな。彼らが要らないと言えば、俺は」

道化師「美しい自己犠牲、さらば御前の願い叶えてやろう」

道化師の仮面の隙間から見える素は美しく笑い、
男の心臓の上を指でピンと弾いた。

男「汚いエゴだ」

道化師「御前が言うなら、真実。我と共に来い、名も無き男」

男「無論」

男が背後を振り返れば、

大きな扉は全て開かれ

青々とした木々に二羽の鳥が戯れている姿が見えた。

男「これで全て善しとなるのだ」

男と道化師は道無き道を往く。

後ろを見てももう、懐かしく思われる景色はない。

二人をもつ、見える者はない。

道化師「汝が為に彼の者は死んだと言われれば、
汝はどう思うだろうか……？」

道化師は幸せそうな者たちの上で
黒い灰を降らした。

N u l l

少年「歩くことを忘れた訳では無かった。嫌気が差したのでも無かった。」

小さな花に向かって少年は語りかける。

背後には月。

妖精「ではどうして、歩みを止めてしまったの？」

少年「矢印を見失ったから」

少年は寂しげに笑い、立ち上がる。

妖精「矢印？」

少年「立ち止まることを知らずに歩いてきた。今まで信じてきた、それがずっと続くことを。」

妖精の頭を撫でる。少年は続けた。

少年「でも違ったのだ。永遠なんて無い、脆いものだった。僕の矢印が立ち止まってしまったから、僕も進めなくなってしまった。」

妖精「それは誰の所為？」

少年「さあ、誰だろうね。」

真夜中も過ぎ、月は低くなる。光は未だに照らし続ける。

妖精「光も私たちも、いつかは消えてしまう？」

少年「いつかは。」

妖精「君の矢印は、今はどこかで行く先を指しているかもしれないよ。」

少年「かもしれないね。」

妖精「それでも君は、歩みを止めるのね？」

少年「そうだね。」

月明かりの中、立ち止まったまま会話を続ける少年と妖精。

少年「僕は行く先を示す光を失う怖さを、二度と体験したくないんだ。」

少年の零した涙を、妖精は優しく拭った。首を横に振りながら。

妖精「大丈夫、大丈夫。私たちが居るから、先に進もう？ 私たちが、君の光を探し出してあげるから。」

少年「ありがとう。でも、乗り越えられるかな？」

妖精「大丈夫。」

大丈夫、と妖精は繰り返し、少年は一步步歩き始めた。

妖精「時間は掛かる、立ち止まるより歩く方が辛いのも確か。でも時間が掛かっても良い。立ち止まったままより少しでも歩ければ良い。だからお願い、力を下さい。」

妖精は背後を振り返って、大きく輝く月に祈った。

その月は普段よりも、頼れるものに見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0935r/>

【Lesedrama】Tr?ume sind Sch?ume

2011年6月14日14時52分発行